

## 11 自分らしく生きる権利としての福祉の実現を願って

増田 百代 ももよ  
 (社会福祉法人はのさと福祉会理事長)



### 幼い戦争体験……

私は一九四四年に福岡県の門司もじで生まれました。第二次世界大戦が終わる一年前です。幼いころ、今の子どもたちが母から絵本を読んでもらうように、私は母から戦争の話を聞いて育ちました。私が生まれた翌日、米軍による空襲で隣の家に爆弾が落ち、おばあさんが吹き飛ばされてミンチのような状態でした。たたきつけられたことや、門司港から出港する海軍兵が、三日後には死体で帰ってきた話など、毎日聞かされていました。

私自身は、食料がなく栄養失調の状態で育ちました。小学校の四年生ぐらいまでは体中に痘痕あはたがあり

ました。明日炊く米がない日があり、今でも幼いときの飢えの苦しみがからだの隅に残っています。母は弱った身体でただただ、生活を守っていました。

やさしい母の受身な生き方を見て、私は小学生のときから自分で働きたいと思っていました。一生働きつづけるためには、大学へ行き資格を取りたいと思って、幼児教育課を選びました。学生時代に友人の紹介で京都大学の保育所づくり運動を知りました。その運動を通して、これからは幼稚園ではなく保育所だと思いい、保育士になりました。

### 保育現場から保育運動へ……

一九六九年、神戸大学職員組合婦人部を中心として

つくられた、職場内無認可共同保育所に就職しました。手さぐりのなかでの保育でしたが、毎日子どもたちと一緒に生活することが楽しく、充実した日々でした。また、子どもたちがゆたかに育つためには、保護者とともに子どもを育てることが大切だと気づき、保護者の話を聞く時間を大切にするようになりました。

そんなとき、保育運動の大先輩である横田昌子さんから「保育運動の専従者」になりませんか、と声をかけられました。「今私は本当に保育が楽しく、保育所の子どもたちがかわいくてたまらないのでできません」と答えました。横田さんは、「あなたが一生かかって育てられる子どもは何人ですか、たくさんの子どものために働く人が必要です」と言われて、一九八二年に保育所を退職し、兵庫県保育所運動連絡会の専従事務局長になり、保育運動に専念しました。

まず兵庫県の実態を知ることからはじめ、そして、兵庫県の広さを知りました。氷ノ山ひょうのせんの山の中腹や小さな漁港、沼島にも保育所がありました。その保育所とも共にありたいと願って、運動をしてきました。

### 被災経験を経て、認可保育所づくり運動へ……

一九九五年一月一七日、阪神淡路大震災に見舞われました。被災直後、支援センターを立ち上げ、厚生労働省へ交渉団を派遣し、①すべての措置の継続、②震災前の措置費の保障、③保育士の人権の保障、④被災地の子どもの保育料の無償化、⑤復旧・復興費の全額保障、⑥保育所給食の食材確保 という六項目の要望書を提出しました。

不十分ではありますが、大半の要求が通りました。しかし、無認可共同保育所へは、なに一つ補助がありませんでした。無認可保育所にやむをえず通っている子どもたちも、保育を必要としている子どもたちにも変わりはない。「法の下の平等」を願って、兵庫県保育所運動連絡会総会で「社会福祉法人を創設し、認可保育所につくり変える」ことを特別決議しました。この運動をすすめる、最後につくった「はのさと福祉会」の理事長をしてくれる人を探しだせなかったため、責任を取って私が理事長になりました。「子どもは歴史の希望」を座右の銘として、今も兵庫県保育所運動連絡会の会長と二足のわらじを履いて活動しています。